

# 機械仕掛けの国家身体—— メタファーとしてのアメリカの ボディ・ポリティックに関する覚書

新 関 芳 生

**Synopsis:** The metaphor of the nation as a body originated in Plato's *Republic* or Aristotle's *Politics* and has its roots deep in the European political thoughts. But this has been long neglected in the American political science, for the disavowal of the monarchy in England furnished a theoretical and ideological basis for the founding of the United States and thus scholars of the field have not harbored a conception that America as a nation has its figurative body. But the corporeal metaphor is repeatedly embodied in the American literary imagination. The aim of this brief note is to historically trace the metaphor of the body politic among several American literary texts and to show how closely the image of the nation as a body is knitted in the literary (or political) discourses. And this analytical interpretation enables us to detect "artificiality" of America through such an image of a mechanical body as Thomas Hobbes compares with his concept of commonwealth in *Leviathan*.

## は じ め に

アメリカという国家には身体のイメージで現れるボディ・ポリティックが存在するかどうか、そして、仮にそれがあるとするならば、「人工人間」、すなわち、自動人形オートマンのイメージを取りうるのだろうか。このような疑問には、最初から大きな矛盾が生じているのが明らかである。というのも、国家が身体のイメージ、より具体的には、カントロヴィッチ (Ernst. H. Kantorowicz) が『王の二つの身体』(*The King's Two Bodies*, 1957) で指摘するような、「王の身体」という形で可視化されるのは君主制の国においてであり、そもそもその君主制、王制を否定し、共和国として産声をあげたアメリカ合衆国では、その国家政体が王の身体のイメージで表されることは、理

論上はありえないということになるからだ。

しかしながら、Catherine A. Holland が Calude Lefort を引用しつつ指摘しているように、経済危機、社会分裂、階級の衝突、戦争の勃発などの危機的な状況においては、国家が身体化されたイメージで出現することがある。つまり、社会全体が危機的な状態にあるときに、身体が政治状況に突如として姿を現すということは、リベラルな民主主義的秩序から、身体が完全に消し去られたというのではなく、それどころかそのような秩序によって再設定（reconfigure）され、あるいは秩序の中に組み込まれたということを示唆しており、身体は、現代の公的な領域にとって不可視なものとされているか、あるいはこのような領域の内部で透明なものとされたのかもしれないが、それにもかかわらずそれは、秩序それ自体が非常に危機的な状況となるようなときにおいて可視化する（あるいは可視化される）政治的な力として保有されていることになるのだ<sup>1</sup>。本稿では、ほぼ等閑視され、無きものとして扱われてきた、身体化されるアメリカのボディ・ポリティックの軌跡を、主に文学作品の中で通史的にたどり、アメリカの国家政体は身体 метаフェーでは現れないとする、主にアメリカ政治学における従来までの見解に反論を試みる。さらにその身体が時に機械仕掛けのメタフェーで現れることを示し、アメリカがその内奥に胚胎すると言われている国家の「人工性」の一端を明るみに出したい。

## I

国家を身体のメタフェーで表現する伝統は、はるか古代ギリシャから連綿と受け継がれており、たとえばアリストテレスは『政治学』の第5章において、国家の健全なあり方を、均整のとれた身体になぞらえて論じている<sup>2</sup>。このメタフェーはその後も西欧の政治学的文脈の中で生き続け、17世紀になってトマス・ホブズ（Thomas Hobbes）へとたどり着く。その主著『リヴァイアサン』（*Leviathan*, 1651）のあまりに有名な冒頭部分でホブズは、『旧約聖書』の「ヨブ記」41章に出てくる怪獣の名を借りて、人々が

その生命を守るために契約を結んで設立した政治共同体＝コモンウェルス（国家）をリヴァイアサンと名付け、しかもそれを自動人形（*automata*）へとたとえている。

Nature (the art whereby God has made and governs the world) is by the art of man, as in many other things, so in this also imitated, that it can make an artificial animal. For seeing life is but a motion of limbs, the beginning whereof is in some principal part within; why may we not say, that all automata (engines that move themselves by springs and wheels as doth a watch) have an artificial life? For what is the heart, but a spring; and the nerves, but so many strings; and the joints, but so many wheels, giving motion to the whole body, such as was intended by the artificer? Art goes yet further, imitating that rational and most excellent work of nature, man. For by art is created that great LEVIATHAN called a COMMONWEALTH, or STATE, (in Latin CIVITAS) which is but an artificial man : (Hobbes 7).

彼がこの箇所では自動人形の比喩を用いているのは、その人工性に重点を置いているというよりも、むしろミメシス的な視点からである。人間が神のアナロジーであるのと同様に、コモンウェルスという自動人形は、人間とのアナロジーによって概念化され、可視化されるのである。人間は技術＝**Art**によって、自然＝**Nature**を模倣することができるという考えに基づき、自然人、すなわち人間と、人工人間であるコモンウェルスというボディ・ポリティックの対応関係は、オートマトンがミメティックに人間の似姿とされる関係性と対応させられているのであって、コモンウェルスが、自動人形から連想されるような機械的で、意志や魂をもたない非人間的な性質を帯びているわけではない。

ホブズが提示した社会契約論による国家政体の構築に関する考えは、後

にジョン・ロック (John Lock) の『統治論』 (*Two Treatises of Government*, 1690) やジャン=ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau) の『社会契約論』 (*Du Contrat Social*, 1762) などによって再検討される。ロックの『統治論』は、王権神授説に対する反論を基調としており、特にその第二論の 19 章「統治の解体について」において論じられている、生命や財産が脅かされる場合、人民が政府を解体することができるという抵抗権が、アメリカがイギリスから独立する際の強固な理論的基盤となったことは周知の事実である。

... 'tis in their Legislative, that the Members of a Commonwealth are united, and combined together into one coherent Body. This is the Soul that gives Form, Life, and Unity to the Commonwealth: From hence the several Members have their mutual Influence, Sympathy, and Connexion: And therefore when the Legislative is broken, or dissolved, Dissolution and Death follows (Locke 407).

このようにロックのテキストにおいても、国家政体は身体イメージで語られているのだが、アメリカ独立に非常に大きな影響を与えたはずのこのテキストにおける国家身体メタファーが、その後のアメリカにおいてどれだけの意味や影響力を与えたのかは明らかにはされていないようだ。

1620 年にメイフラワー号に乗って新大陸へとやってきたピューリタンたちの姿は、イギリスでの弾圧から逃れ、信仰の自由を求めてアメリカへと渡ってきたというのが一般的な認識だろうが、彼らがプリマス植民地で作成した有名な「メイフラワー誓約」 (“The Mayflower Compact,” 1620) には、社会契約に基づく政治体を樹立することが謳われながらも、当時のイギリス国王であるジェイムズ 1 世 (James I) への忠誠がその宣言において表明されている。

We whose names are underwritten, the loyal subjects of our dread

Sovereign Lord King James, by the Grace of God of Great Britain, France and Ireland, King, Defender of the Faith, etc.

Having undertaken, for the Glory of God and advancement of the Christian Faith and Honour of our King and Country, a Voyage to plant the First Colony in the Northern Parts of Virginia, do by these presents solemnly and mutually in the presence of God and one of another, Covenant and Combine ourselves together into a Civil Body Politic, for our better ordering and preservation and furtherance of the ends aforesaid; and by virtue hereof to enact, constitute and frame such just and equal Laws, Ordinances, Acts, Constitutions and Offices, from time to time, as shall be thought most meet and convenient for the general good of the Colony, unto which we promise all due submission and obedience.

この宣言において植民地における政治機構は、“Body Politic”と表現されている。これは当時としては政体を表すごく一般的な表現であって、そこに身体 метаファーを読みとるのは過剰な読み込みめであると言われてきたのだが、実際のところこの表現の背後にどれだけ身体的なイメージが喚起されていたのか、その検証は行なわないままである。国王への強い忠誠を誓いながら用いられる“body politic”という表現における、宗主国の王の身体と、植民地によって構築されようとしている政治体との間の類比や関係性についてはさらに分析が必要であろう。折しも、この誓約から8年後に医師であるウィリアム・ハーヴェイ(William Harvey)が、まさにこの国王ジェームズ1世に捧げた「心臓と血液の運動に関する解剖学的研究」(“On the Motion of the Heart and Blood,” 1628)の献辞において、国王を心臓にたとえながら国家を身体 метаファーで論じているのである。イギリスにおいて国家が身体化される метаファーは消えていたわけではないのだから、“body politic”という表現に、身体のイメージは付与されていないと即断すべきではないだろう。

アメリカ植民地におけるイギリス国王への忠誠は、その強さに濃淡は生じるものの18世紀に入っても継続しており、総じて植民地の住民たちは、本国への同胞意識をもっていた。後に本国から独立してアメリカ共和国の最初の州となる13の植民地も、それぞれ大英帝国の一員であることに誇りをもっており、本国とそれぞれの植民地の結びつきは、植民地間の関係よりも強固であったことが知られている。独立への願いは、当時のイギリス国王ジョージ3世（George III）が行なった植民地への理不尽な圧制への抵抗の結果生じたものであり、徐々に盛り上がってきたものではなかった。しかし、前述のジョン・ロックの思想や、トマス・ペイン（Thomas Paine）の有名な政治パンフレットである『コモン・センス』（*Common Sense*, 1776）によって強く背中を押される形で独立戦争は始まる。『コモン・センス』においては、イギリスの政体を身体化する記述は明確には現れてはいないが、イギリス国王を「高貴な野獣」と呼ぶ一方で、独立したアメリカの「国王」は、新たに公布されることになる憲章（charter）そのものであり、それに王冠を置くだけでよしとする旨が述べられている。

But where says some is the King of America? I'll tell you Friend, he reigns above, and doth not make havoc of mankind like the Royal Brute of Britain. Yet that we may not appear to be defective even in earthly honors, let a day be solemnly set apart for proclaiming the charter; let it be brought forth placed on the divine law, the word of God; let a crown be placed thereon, by which the world may know, that so far as we approve as monarchy, that in America THE LAW IS KING. For as in absolute governments the King is law, so in free countries the law ought to be King; and there ought to be no other. But lest any ill use should afterwards arise, let the crown at the conclusion of the ceremony be demolished, and scattered among the people whose right it is (34).

独立を支えた言説においては、このように国王と国家の身体性は否定され消滅しており、法的理念によって国が統治される概念が現れている。

1776年7月4日に独立宣言が出され、1788年には合衆国憲法が公布、さらに翌年の1789年に初代大統領であるジョージ・ワシントン（George Washington）が就任し、アメリカは国家としての形を徐々に整えていく。国の体制、基盤を、文字通りほとんど一から作り上げていくプロセスはそれ自体が、ホブズのメタファーにある自動人形の組み立てに通じるきわめて人工的な手続きであろう。それが身体としての国家というメタファーとどのような影響関係にあったかは、今のところ明らかにはされていないが、この時期の国家の身体化として解釈することができるテキストとして、ワシントン・アーヴィング（Washington Irving）の「スリーピー・ホローの伝説」（“The Legend of Sleepy Hollow,” 1820）と「リップ・ヴァン・ウィンクル」（“Rip Van Winkle,” 1819）を考えてみたい。夜な夜なスリーピー・ホローに現れる独立戦争の際に砲撃で頭を吹き飛ばされたヘシアンの騎士が、主人公である貧弱な体つきの田舎教師であるイカボッド・クレイン（Ichabod Crane）に頭を投げつけるというこの物語のクライマックスは、身体における首の交換可能性、すなわち、身体的首がない、あるいは、あっても付け替えができるという解釈が可能だ<sup>3</sup>。翌朝、その頭が新大陸原産のカボチャであったことは、君主制国家の身体における頭＝王を否定する形で始まった新興国家アメリカが、頭の部分が交換可能である身体、つまりジョン・ロックが主張するように、政府・為政者をいつでも改変、交換できる身体であることも示している。同じ作者のテキストである「リップ・ヴァン・ウィンクル」は、さらに明確に、この首のすげ替えが王制と共和制の交換であることを語っている。不思議な眠りから覚めて後、20年後の自分の町にやってきたリップ・ヴァン・ウィンクルが酒場で目にする肖像画の描写には奇妙なところがある。

He recognized on the sign, however, the ruby face of King George under which he had smoked so many a peaceful pipe, but even this

was singularly metamorphosed. The red coat was changed for one of blue and buff; a sword was held in the hand instead of a sceptre; the head was decorated with a cocked hat, and underneath was printed in large characters GENERAL WASHINGTON (779).

この記述で明らかなのは、イギリス国王ジョージ 3 世とアメリカ大統領ワシントンの違いは、顔の造作ではなく、身に付けているものの違いということになり、逆に言えば、二人は交換可能な存在であり、ここに描かれているのは、ひとりのジョージから別のジョージへの、肖像画＝首のすげ替えということになるのである。

## II

アーヴィングのテキストにおいて身体化されている国家のイメージも建国期から 19 世紀のアメリカが、自らの国家政体を身体メタファーで概念化していたという仮説を支えるには、脆弱に過ぎるのかもしれないが、次の例においては、むしろヨーロッパ側から見た時に、ある意味では典型的なアメリカ人が自動人形として見えていた可能性が指摘できる。ジョージ・ワシントンとは異なり大統領にはならなかったものの、アメリカの独立、建国、憲法公布に関し、国の内外に大きな影響を与えたベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) に関し、20 世紀に入ってからではあるが、D. H. ロレンス (D. H. Lawrence) が、『アメリカ古典文学研究』(*Studies in Classic American Literature*, 1923) の中で、フランクリンの有名な『自伝』(*The Autobiography of Benjamin Franklin* フランス語版 1891, 英語版 1893) の中で理想とされるような人間を、「ベンジャミンのお望みどおりの徳に満ちたちっぽけな自動人形」“a virtuous little automaton as Benjamin would have me” (22) と評している。ロレンスにとってはフランクリンは「最初の生粋のアメリカ人」“the first downright American” (15) であり、「最初のアメリカ人の見本」“the first dummy American” (15) である。イギ



リス人の目、ヨーロッパの旧世界の目には、このアメリカ人の代表者はオートマトンとして映っている。ロレンスのこのテキストは、彼独特の諧謔や皮肉に満ちており、ホーソン (Nathaniel Hawthorne) やメルヴィル (Herman Melville) などのアメリカ文学のキャノンへも、一見すると非常に辛辣な批評が加えられているように読めるのだが、その行間には、歴史や伝統の自重に堪えかねて立ち上がれなくなっている旧世界にはない、新世界アメリカがもつ、粗野だが生命力に満ちあふれる新しさへの憧憬と賞賛が見え隠れしている。ロレンスは明らかに、「フランスの宮廷において、イギリスの脇腹に小さな、しかしきわめて危険な穴を空け」ることで “at the Court of France, making a small but very dangerous hole in the side of England” (27), 「ヨーロッパの破滅に貢献した」 “has done more to ruin the old Europe” (27) フランクリンを評価している。このちっぽけな（実際にはフランクリンはそれほどの小男ではなかったのだが、ロレンスは始終彼を矮小化して描写している）アメリカの自動人形は、イギリスという王の身体の脇腹を傷つけ、イギリスのみならず旧世界を破滅に追い込んだのである。ここでは、イギリス王の身体とアメリカという国を代表する自動人形とが並置され、対比させられているのだ。

19 世紀に入るとアメリカは、マニフェスト・デスティニーによる急速な領土の拡張、南北戦争による国家の分断と戦後の再建、テクノロジーの発達とそれによる牧歌的な共和国イデオロギーの衰退を経験する。1829 年、第 7 代の大統領として選出された「オールド・ヒッコリー」ことアンドリュー・ジャクソン (Andrew Jackson) は、その在職期間の 8 年間に、それ以前の 6 人の大統領が行使した回数を上回る、合計 12 回の拒否権を発動している。アメリカでは、独立宣言の思想的支柱となったジョン・ロックの統治論でも論じられているように、建国期以来、立法府が人民を代表する機関であるとみなされてきたのだが、ジャクソンの度重なる拒否権の発動は、行政府の権限強化ととらえられた。このことが建国の時に否定した君主制への方向転換とみなされたため、ジャクソンを、右手に王笏、左手に拒否権をもち、合衆国憲法を踏みにじる国王アンドリュー 1 世 (King Andrew the First)

として揶揄している風刺画が描かれることとなった（図版 1）。1832 年に描かれたこの絵の作者は未詳だが、おそらく、この画家の頭の中には、上述のトマス・ペインの言葉が頭にあったに違いない。アメリカの国王は、憲章の上に王冠を置くだけで十分であるとした、ペインの『コモン・センス』によって消し去られたはずの王の身体が、この風刺画には大統領という姿を取り、あたかも亡霊のようによみがえっている。単なる政治的な風刺画に留まらないの



図版 1 国王アンドリュース 1 世

は、ジャクソンに敵対する政治家たちが、立法府の上位性を守る勢力であることを「ホイッグ」と自称することで示したことからも明らかだ。清教徒革命から王政復古を経て、名誉革命に至るまでの状況、すなわち、王の身体がいったん否定された後に再び呼び戻され、その後完全否定とはならなかったものの、その権限が内閣へと移された時期のイギリスへと、アメリカはやや自虐的に自らをなぞらえていたことになる。

19 世紀に書かれた、オートマトンが出てくる 2 つのアメリカ文学のテキストには、このようなカリカチュアが機械化されるかもしれないという恐怖が描かれている。ウィリアム・ダグラス・オコナー（William Douglas O'Connor）が 1857 年から書き始め、最終的には彼の死後 1891 年に出版された中編小説“*The Brazen Android*”は、フランシスコ会の修道士であり、近代科学の先駆者と言われる 13 世紀のイギリスの科学者・哲学者であるロジャー・ベーコン（Roger Bacon）が作ったという伝説がある、真理を語る真鍮製の頭部をめぐる物語である。この伝説は、エリザベス朝の劇作家であるロバート・グリーン（Robert Greene）が 1589 年頃に発表した、*The Honourable History of Friar Bacon and Friar Bungay* などの下敷きにもなっている。この伝説によるとベーコンは、作り出した真鍮製の頭部から、イングランドを外敵から守るための真鍮製の防御壁をめくらせる方法を聞き

だそうとしたと言われているのだが、オコナーの小説では、この伝説を大幅に語り直している。国王ヘンリー 3 世 (Henry III) の圧政下で苦しむ民衆を救うために、ベーコンは人語を語る真鍮製の頭部のみのアンドロイドを開発し、真夜中に王の寝室で、イギリスの国家の主権を人民に委ねるようこれに語らせて迷信深い王に訴えかけることで、圧政をやめさせようと画策する。作者のオコナーが記憶されているのは、作家としてというよりもむしろ詩人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) の友人、擁護者として、また、奴隷制廃止や禁酒法などの社会改革の熱烈な提唱者としてである。こうした側面から解釈するならば、この小説においてオコナーは、13 世紀のイギリスを描きつつも、南北戦争期あたりのアメリカをそこに重ね合わせていたと読むことが可能であろう。国王に真鍮製のアンドロイドの頭部が語りかけるという構図は、国家身体において判断力をつかさどる頭部を、アンドロイドの頭部によって比喩的に置き換えることであると解釈することができる。

もう 1 つのテキストは、エドワード・ページ・ミッチェル (Edward Page Mitchell) が 1879 年に発表した “The Ablest Man in the World” である。あるアメリカ人が、静養先のドイツのバーデンでひょんなことから医師に間違えられてしまい、たまたま同じホテルの客であるロシアの男爵の青年の急病を診察せざるをえなくなる。診察しているうちにアメリカ人は、このロシア男爵の頭頂部が金属でできていることを発見する。そこに戻ってきた男爵の主治医によると、もともとこの男爵は精神病院で育った知恵遅れで言葉も話せなかったのだが、スイスの時計職人であるこの主治医が、彼の脳を、イギリスの数学者であるチャールズ・バベッジ (Charles Babbage) が考案した、今のコンピュータの元祖とも言える世界最初のプログラムが可能な機械式計算機と置き換えることで、完璧な計算力をもった人間へと改造したのだ。時計職人で主治医であるこの男がもくろんでいるのは、世界を統治するのにより適した、高度な人間を作ることである。アメリカ人の語り手は後にパリで、この男爵が彼の知り合いのアメリカ女性と結婚しようとしているのを知る。アメリカ人はこっそりと男爵の部屋に忍び込んで彼にケンタッ

キー・ウイスキーを飲ませて眠らせ、頭から計算機を取り外して、これをアメリカに帰る船から海に捨ててしまう。

これら 2 つのテキストでは、どちらも、自動人形（正確に言うならば、その頭部）が、政治・統治に関わろうとするというテーマが描かれ、そして両方とも失敗に終わる。また、アメリカ文学でありながら、2 つの物語ともに、その舞台はヨーロッパとなっている。2 つのテキストのみで判断することは危険だが、機械が政治をつかさどるというモチーフは、アメリカ人が潜在的に持っている、国家の身体化への不安感、つまり絶対君主制への不安と、その身体が機械化し人間を統治することへの恐怖を、旧世界のヨーロッパに転移させて表現しているのではないだろうか。ここでの政治を行なう機械は、もはやホップズが『リヴァイアサン』で述べたような人間のアナロジーとしてのオートマトンではなく、無機質の純粋なマシンになってしまっているのだ。

### III

オコナーやミッチェルなどの 19 世紀のテキストの中に埋め込まれている、政治機構の中核が機械であるという幻想と恐怖は、20 世紀に入るとより明確な形で姿を現すこととなる。1954 年に出版された『人間機械論』(*The Human Use of Human Beings*) の第 2 版の中で、ノーバート・ウィーナー (Norbert Wiener) は、その 2 年前に出版されて大きな反響を巻き起こした彼の代表的な著作である『サイバネティックス』(*Cybernetics: or Control and Communication in the Animal and the Machine*, 1952) に対して書かれた、フランスのデュバル神父の評論を紹介している。

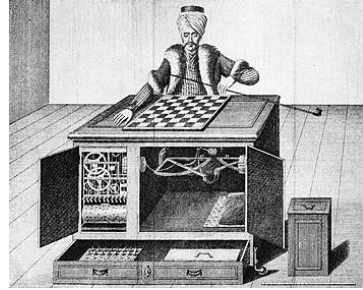
I shall quote a suggestion of his which carries out some of the dire implications of the chess-playing machine grown up and encased in a suit of armor.

... Can't one even conceive a State apparatus covering all systems of political decisions, either under a regime of many states distributed over the earth, or under the apparently much more simple regime of a human government of this planet? At present nothing prevents our thinking of this. We may dream of the time when the machine á gouverner may come to supply—whether for good or evil—the present obvious inadequacy of the brain when the latter is concerned with the customary machinery of politics. [...] This is a hard lesson of cold mathematics, but it throws a certain light on the adventure of our century: hesitation between an indefinite turbulence of human affairs and the rise of a prodigious Leviathan. In comparison with this, Hobbes' Leviathan was nothing but a pleasant joke. We are running the risk nowadays of a great World State. ... (178–80)

ここで述べられている将来への不安は、政治判断が機械によって行なわれ、フォン・ノイマン（John von Neumann）らが提唱する数学的なゲーム理論の様相を帯びることに対して投げかけられているものである。この状況をウィーナー自身は「チェス指し機械が甲冑をまとった時の恐ろしい可能性」と呼んでおり、一方デュバルは、この状況に比べれば「ホップズが描いた『リヴァイアサン』などは他愛のない冗談に過ぎない」とまで言い切っている。『人間機械論』における、この評論の直前までの部分でウィーナーは、ノイマンの大著『ゲームの理論』（*Theory of Games and Economic Behavior*, 1944）などをふまえながら、電子計算機（コンピュータという言葉はまだ使われていない）によるチェス指しの機械に関する考察を述べており、その際に、エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）のエッセイである“Maelzel's Chess Player”（1836）に言及している。ウィーナーと、おそらくデュバルの頭にあったチェス指し機械とは、ハンガリー人のヴォルフガング・フォン・ケンペレン（Wolfgang von Kempelen）が製作した、

通称「トルコ人」(The Turk)と呼ばれていたチェスを指す自動人形のことでありと考えられる(図版2)。

ウィーナーはまた、冷戦構造下の東西両陣営、特にアメリカと旧ソ連においては、軍事面に関しては、すでに機械がまるでカードかチェスを行うように戦略・政策を作成していることを指摘する。ここで彼が言う機械とは実際のマシンのみならず、人間が単なる部品として組み合わされてできる巨大な組織体をも含むものである。



図版2 自動チェス人形「トルコ人」

I have spoken of machines, but not only of machines having brains of brass and thews of iron. When human atoms are knit into an organization in which they are used, not in their full right as responsible human beings, but as cogs and levers and rods, it matters little that their raw material is flesh and blood. What is used as an element in a machine, is in fact an element in the machine (185).

彼の死の年である1964年に出版された『科学と神』(God and Golem, Inc)における、サイバネティックスの社会科学への応用可能性について論じた章の中で彼は、ボディ・ポリティックと個人の身体とのアナロジーは正当で有用なアナロジーであると述べている。またアメリカという国家に関してウィーナーが思い描いていたのは、理想的な形で民主主義が実現されている社会ではなく、各人が割り当てられた機能を果たすように要求された、オートマトンのような組織である<sup>4</sup>。ウィーナーにとってのアメリカとは、コンピュータ化された自動人形として不気味に立ち現れてくるものであったのだ。

アイザック・アシモフ(Isaac Asimov)や、ケン・キージー(Ken Kesey)のテキストは、ウィーナーが描く、政治を行う機械や、オートマトン

としての国家への不安、恐怖を明確に表現している。アシモフの短編集『われはロボット』(*I, Robot*, 1950)に収められている「証拠」(“Evidence,” 1946)では、政治の中枢にいる人物が、人間以上の知性や論理性を備えたヒューマノイドであるかもしれないことからくる、周囲の人間たちの反感や嫌悪が描かれる。また「厄災のとき」(“The Evitable Conflict,” 1950)においては、「証拠」の主人公は、世界連邦として統一された組織体の元首となっている。しかし、最後に明らかになるのは、実際にこの地球全体の資源等の供給バランスなどを分析、判断しているのは、このヒューマノイドとおぼしき元首ではなくコンピュータであることである。このコンピュータ“*Ma-chines*”は、アシモフが設定した有名なロボット三原則に厳密に従いつつ、人間を生かすように地球という惑星を管理していくのである。人間はロボットによって調整され生かされているのだ。ケン・キージーの『カッコーの巣の上で』(*One Flew Over the Cuckoo's Nest*, 1962)においては、語り手であるブロムデン(“Chief” Bromden)の視点から、彼らが入院している精神病院は、ロボット化している婦長が、効率を第一に考えて、懐中時計のようにコントロールしていく世界として描写されている。この小さな病棟は、より大きな「コンバイン」と名付けられている組織体＝アメリカへと組み込まれている存在であり、語り手の幻想の中では、アメリカ全体が機械化されている。婦長のロボット化した身体は、そのままロボット化したコンバイン＝アメリカとして拡張されるのだ。“combine”という語が、「メイフラワー誓約」においても、またジョン・ロックのテキストにおいても、個人をボディ・ポリテックへと組み込む概念を表現する際の動詞として用いられていることは、この小説におけるコンバイン＝アメリカが、ロボット化された身体メタファーとして機能しているという解釈を支えるものであろう。病棟の中で、主人公のマックマーフィーが漏らす「中共軍の捕虜収容所そっくりだ」“A hell of a lot like a Chinese Prison Camp.”(64)という感想は、ノーバート・ウィーナーが指摘していたように、冷戦下においては、実は西側も東側も政治の機械化という点においては、同じ様相を呈していることを暗示している。最後までこのコンバインに機械化されてしまうことを拒んだ

マックマーフィーは、最終的には脳外科手術によって廃人、すなわちロボットとされることで、強制的にこの組織の中へと組み込まれてしまう。

1990年代に入り、ポール・オースター（Paul Auster）は、ホップズのテキストとあえて同じタイトルをつけた小説『リヴァイアサン』（*Leviathan*, 1992）において、レーガン（Donald Reagan）が大統領となった1980年代を背景として設定し、保守化へと進む状況の中で、アメリカ各地に点在している、国家の象徴的身体とも言える自由の女神像を爆破するというエピソードを描いている。爆破犯人は自らを爆弾で吹き飛ばすこととなり、その身体をバラバラにして死ぬ。イカボッド・クレインにもたとえられる体つきをしているこの犯人ベンジャミン・サックス（Benjamin Sachs）が先に述べた「スリーピー・ホローの伝説」とのインターテキスト性を示しているのは間違いない。自由の女神とテロリストの双方の身体がバラバラになるという情景に、レーガンの在任中ついに達成されることになる、冷戦の終結を読み取るのは行き過ぎであろうか？ これらの身体がバラバラになったのちに、怪物リヴァイアサンとして姿を現したのは、ハリウッド俳優としてのパフォーマンスを身につけ、任期の最初に暗殺の銃弾を受けても、不死身のごとくよみがえったレーガンその人なのではないか。その点では、王としてカリカチュアされたアンドリュー・ジャクソンと同じように、大統領の身体そのものが国家の身体となるような回帰が起きたと言えるだろう。<sup>5</sup>

## お わ り に

21世紀のアメリカの国家身体は、どうなるのだろうか？ 国民国家の枠組みそのものが曖昧となり、意味を失いつつある今、アメリカに限らずどここの国においても、ボディ・ポリティックのアナロジーが身体化する現象は消滅しつつあるのかもしれない。国家身体の消滅後に現れてくるのは、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートが言うような、近代の社会秩序が崩壊したあとの不安定と混沌の中に姿を見せる、身体ですらなく、人民でも国家でも、共同体でさえない、生きた社会的な〈肉〉である「マルチチュード」な



のだろうか？

崩壊した近代の社会体や消失しつつある人民へのノスタルジーを一切排した視点から現代のポストモダン社会を眺めたとき、現在私たちが体験しているのは身体ではない一種の社会的〈肉〉、生きた実質としての〈共〉的な〈肉〉であることが見えてくる。(中略) こうした存在論的観点から見たとき、マルチチュードの〈肉〉は絶え間なく社会的存在を拡張する基本的な力であり、それはあらゆる伝統的な政治的—経済的価値尺度を上回りつつ生産することが明らかになる。風や海、大地を手なづけようとしても、それはつかまえようとする手の大きさをはるかに超えている。政治的秩序と管理の観点からは、このようなマルチチュードの基本的な〈肉〉は腹立たしいほどにつかみどころのないものに映る。なぜならこれは、政治的身体の階層的な器官に完全に取り込むことができないからだ。(中略) 身体ではない、この生きた社会的〈肉〉は、一見したところモンスターのように見られかねない。少なからぬ人びとにとって、人民でも、国家でも、共同体でさえもないマルチチュードという存在は、近代の社会秩序が崩壊した後の不安定と混沌のまたひとつの例にしか見えない。マルチチュードは、彼らの頭のなかでは遺伝子工学の暴走や、産業や核あるいは環境面での大災害のもたらすおぞましい終末と同類のポストモダン社会の破滅的状况にすぎないのだ。形のないものの、秩序のないものは恐怖をかき立てる。〈肉〉のもつ怪物性は自然状態への回帰ではなく社会そのものの帰結であり、人工的な生なのだ (17-19)。

過剰なまでに形容語句が重ねられているのは、現代に姿を現しつつある「肉」でありながら「身体」ではない「モンスター」を言語化し形象化することの困難さを示している。「肉」と「人工」の奇形的なハイブリッドの姿は、精緻な自動人形としてのホップズ的な国家政体、「政治的身体の階層的な器官」、の対極にあるものなのかもしれない。いや、対立項というよりは

むしろ、これまでのボディ・ポリティックに組み込まれていた自然=Natureと人工=Artとの二項対立が溶け合い、異常な変質を経た成れの果てとすべきなのだろうか。このような「マルチチュード」の時代にあつて、自明のものとされてきたアメリカの例外主義が、仮に今後も生き残るのであれば、その時にこそ、これまで透明なものとして不可視だとされてきたアメリカの国家身体は、オートマンとして可視化されるのかもしれない。

注

<sup>1</sup> Catharine A. Holland. *The Body Politic*, pp.xviii–xix.

<sup>2</sup> アリストテレス『政治学』p.214–15

<sup>3</sup> Washington Irving のテキストに関するこのような解釈に関しては、“America in Search of America” のテーマで行なわれた、第 17 回日本アメリカ文学会北海道支部大会シンポジウム（2006 年 12 月 2 日）において、より詳細な分析を試みた。

<sup>4</sup> Norbert Wiener. *The Human Use of Human Beings*, pp.50–51

<sup>5</sup> この小説においては、自由の女神は、ある自動人形とインターテキストによって関連させられている。自由の女神像の爆破犯人であり、作家でもあるベンジャミン・サックスの唯一の長編小説のタイトルは『新コロッセス』（*The New Colossus*）であり、このタイトルが、アメリカ人であればおそらく誰もが知っており暗誦もできるソネットのタイトルと関連させられているのは間違いない。自由の女神の台座に埋め込まれている、このエマ・ラザルス（Emma Lazarus）のソネット “The New Colossus” の最初の 2 行にある “Not like the brazen giant of Greek fame,/ With conquering limbs astride from land to land” の “brazen giant” とは、ギリシャ神話に出てくる鍛冶と発明の神であるヘーパイストスが作り、クレタ島の警護にあたつたとされる青銅製のロボットであるタロスのことである。新世界の自由の女神は、旧世界の青銅製のロボットとの対比において描写されているのである。女神そのものはロボット化されていないが、常に人類最初期のロボットと関連させられており、Nature と Art の対立を前景化している。

## Works Cited

Asimov, Isaac. *I, Robot*. New York: Bantam Books, 2008.

Auster, Paul. *Leviathan*. Penguin Books, 1992.

Hobbes, Thomas. *Leviathan*. New York: Oxford University Press, USA, 2009.

Holland, Catherine A. *The Body Politic: Foundings, Citizenship, and Difference in the American Political Imagination*. New York: Routledge, 2001.

Irving, Washington. *Washington Irving: History, Tales, and Sketches: The Sketch*

- Book: A History of New York: Salmagundi: Letters of Jonathan Oldstyle, Gent.* New York: Literary Classics of the United States, 1983.
- Kesey, Ken. *One Flew Over the Cuckoo's Nest*: Revised Edition. New York: Penguin Books, 1996.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. New York: Penguin-Books, 1990.
- Locke, John. *Two Treatises of Government*. Cambridge University Press, 1988.
- Mitchell, Edward Page. *The Crystal Man: Landmark Science Fiction*. New York: Doubleday, 1973.
- O'Connor, William Douglas. *Three Tales: The Ghost, the Brazen Android, the Carpenter*. Nabu Press, 2010.
- Paine, Thomas. *Collected Writings: Common Sense, The Crisis, Right of Man, The Age of Reason, Pamphlets, Articles, & Letter*. New York: Literar Classics of the United States, 1995.
- Wiener, Norbert. *Cybernetics, Second Edition: or the Control and Communication in the Animal and the Machine*. Cambridge, M. A.: The MIT Press, 1965.
- . *God and Golem, Inc.: A Comment on Certain Points where Cybernetics Impinges on Religion*. Cambridge, M. A.: The MIT Press, 1966.
- . *The Human Use of Human Beings: Cybernetics And Society*. Cambridge, M. A.: Da Capo Press, 1988.
- アリストテレス, 北嶋美雪, 松井正俊, 尼ヶ崎徳一, 田中美知太郎, 津村寛二訳『政治学』, 東京: 中央公論新社, 2009 年。
- アントニオ・ネグリ, マイケル・ハート, 幾島幸子訳, 『マルチチュード 上・下: 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』, 東京: NHK 出版, 2005 年。
- ウィリアム・ハーヴェイ, 岩間吉也訳, 『心臓の動きと血液の流れ』, 東京: 講談社, 2005 年。